

はじめに

私が朝鮮戦争に焦点を当てて戦後の日本を再検討しようと思ったのは二〇一三年だった。そのとき私は日韓会談について学んでいた。その過程で、戦後初めて韓国へ派遣された日本の新聞記者のことを知った。日韓会談が始まる前にもかかわらず一九五一年七月の新聞には韓国へ「特派員」が派遣されたと書かれていた。国交もないのにビザはどうしたのかと不思議に思ったが、すぐに朝鮮戦争の休戦会談取材するため国連軍の従軍記者として派遣された記者であるとわかった。

このときの私の関心は戦後の日本社会で植民地支配がどのように捉えられていたのかということにあったので、韓国に派遣された日本人記者を通じてそのことにアプローチできないかと考えた。そのような中で偶然にも私は朝鮮戦争への従軍体験を持つ元船員の方に出会った。

その後も少しずつ朝鮮戦争について調べていくと、朝鮮戦争に対する日本社会の人びとの態

度がとても多様であることがわかってきた。どのグループにいるか、どの地域に暮らしているかによって朝鮮戦争への関心の向け方が異なることに気づいたのである。

では、朝鮮半島をルーツとした人びとは朝鮮戦争をどのように受け止めていたのだろうか。そのことが知りたくて映画や本、在日朝鮮人の方のエッセイなどを読んだ。すると、それまで「朝鮮特需」で日本の経済は持ち直した」だとか、「一九五〇年に朝鮮動乱が起き五三年に休戦協定が結ばれた」などと言ってわかったつもりになっていた自分の想像力のなさに愕然とした。同時に、そんなふうには想像しないままにいられたことにこそ、何か、戦後の日本を見つめ直すポイントがあるのではないかとも思い始めた。こうして私は、日本社会にとって朝鮮戦争とは何だったのかということについて考え始めていった。

一九五三年七月二七日、板門店で朝鮮戦争の休戦協定が結ばれた。国連軍司令部の代表、朝鮮民主主義人民共和国の人民軍、中華人民共和国の義勇軍が調印した。大韓民国はその場に参加しなかった。現在も、最終的な平和条約には至っていない。そしてこれほど長く終戦に至らずにきた朝鮮戦争は戦後の日本社会では正面から受け止められてこなかった。

日本では朝鮮戦争をめぐる人びとの記憶は間接的で非軍事的な側面に焦点が当てられることが多く、とくに朝鮮戦争と結びつけて語られるのは「特需」についてである。戦後日本の高度経済成長への原動力となったというように。そして裏面で生じていた犠牲への想像力が働くこ

とはなかった。しかし、そもそも日本社会に暮らす人びとは朝鮮戦争において特需の利益を享受しただけだったのだろうか。

日本は敗戦後、連合国の占領下に置かれ、実質的な統治はアメリカによりなされた。そのアメリカの主導する対日方針が懲罰的なものから寛大なものへと大きく転換したのは国際社会の冷戦状況が背景にあったことはよく知られている。本来はアジア太平洋戦争を終結させるための対日平和条約（サンフランシスコ講和条約）は日本とすべての連合国との間で締結されるはずだった。しかし、一九五〇年六月二五日に朝鮮戦争が勃発し、一〇月に中華人民共和国が参戦して冷戦の対立が決定的なものになるとアメリカは東アジアでのこれ以上の共産主義の浸透と拡大を阻止するため、日本の占領政策と講和条約のあり方を変更していった。また朝鮮戦争は在日アメリカ軍の固定化と日本の再軍備への直接的な引き金にもなった。こうして「平和国家」としてスタートした戦後日本のあり方は敗戦からたった五年で形骸化し始める。このようにしてみれば、朝鮮戦争は戦後日本のあり方を規定したと言えるほどの出来事であった。にもかかわらず、なぜ、日本社会では朝鮮戦争は忘れられたかのような扱いをされてきたのだろうか。

日本社会における朝鮮戦争の忘却についてはもう一つの側面についても考えたい。日本では朝鮮戦争を一九五〇年に始まって一九五三年に休戦協定が結ばれた戦争というような捉え方が一般的だが、それ以前からすでに朝鮮半島では左派と右派の分断、暴力を伴った対立が生じて

いた。この対立の要因は植民地解放後の朝鮮半島をどのように形成していくかということへの立場の違いにあったが、それはさらに時間を遡ると「植民地時代における朝鮮社会の分裂・対立」に起因していた^[1]。このようにほんの少し遡ってみれば、解放後の朝鮮半島に日本が無関係でないことが見えてくる。だが、朝鮮戦争についてこのようにして振り返る人は日本社会では稀である。また、植民地解放後も日本にとどまった朝鮮人（在日朝鮮人）^[2]は日本人にとって身近な存在だったが、彼ら彼女らが日本においてこの戦争に翻弄されたことについても日本社会では広く共有されてはこなかった。帝国であった日本は拡張した領土を敗戦とともに喪失したが、そのとき同時にその領土にまつわる歴史も一方的に捨ててしまったのだろうか。

過去の出来事を知ることがとても大切なことだ。だが、もし、「そうだったのか」というだけで済まされてしまったら、それはとても悲しいことではないか。この数年のように感じるようになった。「わかった」ようにしてその出来事を通り過ぎていくことは、過去の、現在の、そして未来の誰かを尊重しないことになるのではないかと思うのである。

「大きな歴史」——それは国家とか国際政治といった大きな力学によって紡がれる歴史とも言い換えられる——の中で生きる個人の歴史、いわば「小さな歴史」に私は強く惹かれる。それは私自身も大きな力学に翻弄されながら生きる小さな個人だからであり、またこれまで語り継がれてきた公的な記憶のあり方をときほぐすきっかけがこうした「小さな歴史」との遭遇にあ

るかもしれないと考えるからだ^[3]。

この数年、戦後の日本社会における朝鮮認識について、朝鮮戦争と日本社会との関わりについて考えてきた。その中で「小さな歴史」を紡いできた様々な人に出会った。直接の出会いもあれば記録や本を通じての場合もあった。これらの出会いを通じてこれまで共有されずに忘却されてきた出来事や見ることなく済ませてきた過去を知り、私自身の内にあったこれまでの記憶のあり方は揺さぶられた。

日本社会では朝鮮戦争が忘却されてきたし、その発端に日本による植民地支配が関係してい

[1] 林哲「東アジア冷戦と朝鮮における政治的暴力の起源——解放一年史を中心に」（徐勝編『東アジアの冷戦と国家テロリズム——米日中心の地域秩序の廃絶をめざして』御茶の水書房、二〇〇四年、二二頁）。

[2] 「朝鮮人」という語は、国籍上の帰属や外国人登録上の「国籍」表示を直接に示すものではない。確かに日本による植民地支配から解放された後、朝鮮半島は二つの国家——大韓民国と朝鮮民主主義人民共和国——に分割された。だが、朝鮮半島を出自とする人びとが「在日」することになった根本的な要因はそれ以前の歴史的文脈にあったことから、朝鮮半島という地域を指示する用語としての「朝鮮」を用いることにした。

[3] こうした個人史と全体史（あるいは政治史）のどちらか一方ではなく両者の関係への着目は、テッサ・モリー スリズスキの研究に示唆を受けたことによる。「国民国家を中心とした「大きな歴史」だけではなく、個人のライフ・ヒストリーに関係した「小さな歴史」をみよう」とするのは「相互に影響し合う関係」だからであり、だからこそ「小さな歴史」に焦点を当てた歴史の再検討が重要だと彼女は指摘している（『特集・朝鮮戦争と日本』デイスカッション『アジア研究』六一巻二号、アジア政経学会、二〇一五年四月、三二六頁）。

たことはほとんど共有されてこなかった。朝鮮戦争下の朝鮮半島に身を置いた日本人記者や日本人船員の体験を知ったことはこのような戦後のあり方をあらためて見つめ直すきっかけとなった。以下では、こうした人たちの体験の語りや記録あるいはその当時の人たちが織りなした「小さな歴史」の痕跡から知り得た事実を示すとともに、それらを通じて巡らされた私の思考のプロセスも記していこうと思う。第一部では「日本人の見た朝鮮戦争」を検討する。第二部「地域と記憶」では、日常の暮らしの場にある朝鮮の人たちの織りなした歴史の痕跡との遭遇と、その意味について考えてみたい。